医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く！
ニッポンの医療現場 第48回

救急医療の救世主となるか

病気は待ってくれない！ わが国初の夜間診療の救急クリニック

突発的な病気やケガは、病院が開いている昼間の時間帯に生じるとは限らない。しかし、病院のたらい回しや夜間・休日に対応できる医療機関の不足など、わが国の救急医療は多くの問題をはらんでいる。日本初となる夜間診療の救急クリニックへの取材を通して、救急医療の問題点を考えてみたい。

一人で1000件以上の救急患者を受け入れる

救急車で運ばれた患者が、いくつもの医療機関から受け入れを断られる――「たらい回し」という言葉がすっかり定着してしまったことからも分かるように、わが国の救急医療には問題が少なくない。

総務省の報告によると、救急病院が重症患者の受け入れを3回以上拒否したケースは、2011年で1万7281件。医療機関が多いはずの大都市で救急搬送が遅れる傾向が強く、東京都は3500件、埼玉県は2448件でワースト1、2位だった。10回以上の拒否も753件、20回以上も47件もあった。

そんな憂うべき状況下で誕生したのが、日本初の救急・夜間診療に特化した医療機関、埼玉県の川越救急クリニックだ。

「ここに救急車で運ばれてくる患者さんのなかには、救急車の車内で1時間も待たされた方、10件以上、病院の受け入れを断られた方もいます。最も多い方で、40件も断られていました。ここに来られたご家族の皆さんが口を揃えて言いますよ。『これが〝たらい回し〟なんですね』ってね」

と話すのは、院長の上原淳医師。同クリニックの救急車の年間受け入れ台数は約1100台（12年9月～13年8月）。50キロ先の地域から来た救急車の受け入れ要請に応じたこともあるという。都道府県知事が告示し指定を受けた救急指定病院でも、これほど多くの救急車を受け入れるところはそう多くない。

「救急車で運ばれてくる患者さんには、軽症の方も、重症の方もいる。当院でまず患者さんを診察し、救命救急センターや専門病院での治療が必要な方がいたら、高度な治療ができる施設に送っています」（上原医師）

これにより、受け入れ先の高度な医療を行う救急病院の負担が軽くなり、スムーズな救急医療がかなう。まさしく救急医療の門番だ。

昼夜逆転した生活を送り、プライベートな時間もほとんどとれない。それでも、上原医師が救急医療を突き詰めようと思ったのは、一つの苦い経験、19歳の少年の死がある。

今から13年前。麻酔科医の上原医師が、九州の病院で救急医療を行っていたときのことだ。一人の少年がバイク事故を起こして救急車で搬送された。

「胸を強打していたため、胸に血が溜まり、肺から空気が漏れていました。管を使って血を抜く治療をすぐに始めたのですが、出血の量があまりにも多い。それで、外科医を呼んで胸を開けてもらうと、太い動脈が何本か切れていた。処置が間に合わず、少年は亡くなりました」（上原医師）

重症の外傷の多くは、ダメージが多臓器にわたっている。そのため、救急医は救命するためにどこをまず治療するかなどつぶさに戦略を立て、外科医に指示しなければならない。

「もっと多くの救急の知識、経験、技術を得なければならない、さらには救急医療の現状を変えるしかないと、痛感しました」（上原医師）

すでに、地域の救急医療の責任者を担っていた上原医師だったが、その経歴を捨て、高度な救命医療を行う医療機関で、救急専門医としての道を目指した。そして経験を積んだ上で、2010年、川越の地に救急クリニックを開業した。

我々はふつう、救命救急センターや救急指定病院は、どんな急性の病気も診るものと思いがちだ。いや、本来はそうあるべきなのだが、現実は違う。

まず、運ばれてきた患者の病気、ケガに対して、適切な診察と検査をして「緊急性があるか」を見極める救急の専門医が日本には3000人ほどしかいない。圧倒的に少ないため、救急を行う医療機関で救急対応をするのは、ほとんどが別の専門を持つ医師だ。研修を終えたアルバイト医師が待機している病院もある。

夜間のコンビニ受診 一人ひとりに理由

さらに、川越救急クリニックでは救急のほかに、夜間診療も行っている。同クリニックの外来時間は、一般の医療機関があいていない時間帯、曜日のため、外来が集中する。連休ともなると診察まで3時間以上待つこともある。

夜間や休日のケガや病気は、誰でも不安になる。それが分かっているからこそ、上原医師は時間の許す限り、患者の話に耳を傾ける。

「夜間に病院を受診する『コンビニ受診』が問題という人もいますが、今の世の中、生活スタイルが多様になり、また共働きの夫婦も増えている。夜間や休日でなければ受診できない、あるいは子どもを受診させられないケースもあります。話を聞くと、一人ひとりに理由があるんです」

まさに、社会の変化に医療システムが追いついていない現実がここにある。119番で救急車が到着しても、診てくれる医療機関が見つかりにくい首都圏。これは、自身や家族の身に降りかかる重要な問題だ。

行政の支援も皆無で、経営が厳しいなかでも救急医療に尽力する上原医師。救急医療の改善の声を上げることで、その志に報いるのも我々の責務だと思う。

通常は手術室にあるような麻酔器まで用意

今年9月から医師が一人増え、2名で対応する

いとう・しゅんや●医療ジャーナリスト・写真家　国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv　Twitter＝@itoshunya

写真／SHUNYA ITO©　取材協力／山内リカ　協力／川越救急クリニック　http://kawagoeerc.jimdo.com

転載・二次使用禁止